

彙報

台湾における滿蒙の言語

および文献の実地調査

一九六二年十月二十九日より十一月十二日までの二週間、神田信夫、松村潤、岡田英弘の三人が第一回の調査に赴き、将来の本格的調査の可能性について打診を行った。

今回の訪台の機縁となつたのは、一九六〇年十一月台北において開催せられた東亜學術研究会中日韓第一次国際会議に日本代表として出席せられた榎一雄教授が、台湾大学教授広祿氏を知つたのに始まつている。すなわち広祿教授は新疆伊犁出身の錫伯族で、滿洲語を能くするのみならず、家庭内においても全員が滿洲語を使用しているとのことであつた。このことは我々滿文老檔研究会のメンバーにとつて多大の関心事であつたが、さいわいにして東方学研究日本委員会より、表題の調査に関する援助を受けるにおよんで、今回の第一次調査を行つた次第である。

滿洲語については、上述の伊犁出身の広祿教授の言語について観察を行い、すでに相当の新知見を得た。また同氏は波瀾に富んだこの半世紀をロシア領中央アジア各地の中国領事として歴任せられ、さらにはロシア語およびトルコ系諸語に通じておられるとのことである。この面からも多大の収穫が期待されよう。

滿洲語文献については、中央研究院歴史語言研究所において、明清檔案の整理にあたられている李光濤氏の好意により、同所所蔵の檔案類中に多数の重要史料を発見したので、その整理研究が今後の課題とならう。なお台中の故宮博物院の所蔵に帰していると思われる滿文老檔の原檔などについては、いまだ整理がついておらず目睹し得なかつたが、今後その閲覧が許されるよう努力する必要がある。つきに蒙古諸語言については、それぞれ多くの教養ある話し手と接触する機会を得たが、彼等はきわめて我々に協力的であるとともに日本語も堪能であるから、今後の調査によつて多大の成果をあげることと思われる。

我々の二週間の滞在の本拠となつた処は、台北市の郊外南港にある中央研究院であるが、同院は台湾における學術研究のセンターであると共に、歴史語言研究所長の李濟氏をはじめ石璋如・董作賓・郭廷以などの大陸で活躍せられた錚々たる諸氏がおられ、中国研究者にとつては是非とも一度訪れる必要がある。現在進行中の事業はいずれも重要なものばかりであるが、とくに黃彰健氏による明史録の校訂本の編纂は、これが刊行の暁には、明代史研究に一新紀元を劃するのではないかと、多大の感銘を受けた。また先述の李光濤氏による明清史料や、近代史研究所における外交文書の整理も着々と進行している。

図書館としては、目下蔣復綏院長のもとに、国立中央図書館が建設途上にあるが、この無数の明版の蔵書も印象的であつたことを附加えておきたい。(松村 潤)